

サロメの牙

liliput / aliliput

「サロメの牙」

——Another casefile of Matsuki Rika.

*登場人物紹介

松城理香: 私立白峰大学文学部国文学科3年生 推理小説研究会部員 ボブカットで痩せ形の、インドア派の女の子

君(これを読んでいるあなたです!): 私立白峰大学生 推理小説研究会部員

別に取りたてて安らぎを求めている訳ではないが、君はミス研の本拠地・新宿にあるとあるカフェに入った。ここは君の行き付けの店である。古風に重い扉を開けた時、芳ばしい珈琲の香りが鼻をくすぐる瞬間の楽しさと、最近珍しいゆったりした時間の流れる空間に引かれ、君は騒がしいミス研の仲間にここを秘密にしつつ――勿論それに見あう代価も払って――ここに通っているという訳だ。

そんな君が隅のテーブルに、老人よろしく陣取っている松城の姿を認めた時の驚き！
(何だって松城が……？)

君は不意をつかれた驚きと、自分の指定席を取られた腹立たしさにいささか早足で松城の元へ歩いていった。

松城は君に気付いていなかったようだ。声を掛けられて上げた顔に、君が最前感じたのと同種の驚きが見て取れる。

「まあ、此处で逢ったが百年目ね。何やってるの？」

それはこっちの台詞である。君は松城の前に置かれている、昭和の物らしいどっしりとしたテーブルに目を移した。天板には半分ほど飲んであるカップの他に、細身の万年筆と、原稿用紙が何枚か散らばっている。

――松城が書き物？

彼女なら普通パソコンを使うはずだ。松城は訝しげな表情の君に説明した。

「偶にはレトロでアナログなこともしてみたくなるのよ。推理小説書いてみたり、とか。」

推理小説？ 松城が？ レポートじゃなくて？ 枚数だけ見ると短編らしい。ともかく君は原稿用紙を引つつかむと、松城の向かいに腰を落ち着け原稿用紙に目を走らせることにした。

(以下は↓松城理香・作『サロメの牙（問題編）』原稿全文です)

サロメの牙

遠い黒天蓋に下弦の赤い月が煌と下がっている。領主は城館の窓を開け放し、月に今宵の酒宴をお目に掛けようとのつもりか、精緻な切子の杯に注がれた洋酒^{ワイン}を、ちらと天空に向けて傾けた。

「今宵の月のなんと素晴らしいかよ！」

領主は傍らに恭しく畏まる清国の商人を顧みた。商人は長い袖を額の前で組み、東の挨拶で応じる。領主は商人の上得意、今宵の宴は領主がプライベートに商人を招び、日頃の労に報いようとの席。都から奢侈を禁ずる法律が出たばかりだが、領主のいる地までは目付も及ばない。他に具すは小姓、と称さるるうつくしげなる小童^{せん}一人。これはその人形のような顔を少しも崩すことなく、先程から給仕に侍っている。

そして銀のテーブルの向うに座っているのは――細い手首を銀鎖で戒めた異国の姫。

この姫、領主が商人に無理を言って買い入れた上物。人語を操る蛙、首だけの老婆と奇怪なものが跳梁する黒い森から攫った姫だとか。今はもうない王朝の末裔らしいが、詳らかなことは幾ら領主が商人に問い質しても「茨の檻の中より」と笑うばかりで遥と知れぬ。

とまれ、領主の商人からもとめた中で一番の気に入りであることは間違いない。

姫は場違いに的礫とした歯で小姓の捧げ持つグラスに挿した花に噛みついていた。花？――一否、精巧な砂糖漬^{アンゼリカ}け菓子である。黒の浮いた鎖の所為で両の手は利かないが、菓^お子に器用に噛み付いては喰い千切っている。それを領主が姫の薄い頤をかるく持ち上げ、そっと唇ではさみ菓子を奪うのである。姫は幾度となく繰り返されているこの怪^{おか}しな遊戯を拒む風でもなく、茫と水の張ったような空ろな瞳で領主を見上げている。

領主は随分この姫によくして来たつもりである。この砂糖菓子も姫の好物だと聞いて特別に舶来^おの材で作らせたものだ。しかし姫は領主になつくでもなく逆らうでもなく、買われてからずっと泣きもせずに曖昧に日を過ごしている。好物である筈の菓子ですら、鼻先に掲げてやっと噛み

つくくらいだ。領主は余りそれが面白くない。

「マヤリス」

領主は姫の名を口にした。本来なら知ることの許されない名である。姫は何の反応も示さず、一心にマヤリスの花を飲み込んでいる。菓子はマヤリスの花である。姫の名を姫が口にする、名詞の弁証法を楽しもうという趣向である。

花卉の繊細な作りも偏に姫のために施させた物だ。なのに

「マヤリス！」

領主は覚えず声を荒げ立ち上がった。拳をテーブルに打ち付けた弾みか、グラスが宙を舞い石の床に叩き付けられ、粉々に砕けた。しかしやはり姫は頓着しない。

人形のような小姓の手がつうと伸び、グラスの破片を片そうとした。領主はその手を押しとどめ、右手の指で一番大きな破片を摘み上げた。

「あ、お怪我を」

商人が声を上げた。領主の指の間より鮮血が滴り落ちている。

「可いのだ」

領主はそのまま破片の鋭角を、菓子の代わりに姫の鼻先に突き付けた。姫はそれでも、菓子が取り上げられたことに対する僅かな不服の色を表わしたきりである。

不意に領主は破片をひらめかせ姫の頬を引っ掻いた。姫はそこで初めて引きつけた様に表情を変えた。椅子に繋がれたまま折れそうな身体を振らせる。銀の鎖ががちゃりと緊張し、再びゆっくり弛緩した。

領主はそこで満足そうに腰を下ろした。商人が慌てたように袖から手匣を出す。

「良い薬が御座います。ここに」

小姓がゆるりと手匣を受け取り、差し出された領主の手に薬を塗り器用に手当した。

領主は左の手で商人の杯を取り商人の前に出した。商人は洋酒を注ぐ。これは商人が招待の礼にと持参した品。上物だが、毒味役が半分ほど飲んでしまったのには閉口した。領主はグラスに気怠げに口を衝けた。

ふと、領主の動きが止まった。グラスを力なくテーブルに置き、両の手で額を押さえた。

「?!」

胸を掻き毟る格好のまま、ぐらりと領主の体が崩れる。商人と小姓が飛び出し領主を支えたが一既に息の通わぬ軀であった。

ざわりと攪れていく空気の中に、青く色を変えた月の隈なく辺りを照らすのみ。

挑戦状

何だこの時代錯誤なデカダンスは？ これで終わりなのか？ 推理小説だって？ 領主を殺した犯人を当てろということか？ これだけで？ それ以前にこれはちゃんとした推理物として成立しているのか？ 趣味装飾過多のB級風俗短編ではないのか？

クエスチョンマークを幾つも浮かべる君に、松城は頬杖を突いたまま口を開いた。

「追加ルール：

- これは本格ミステリかつ術学ミステリである
- 領主は自殺ではなくこれは計画殺人で、犯人は酒宴出席者の中にいる
- 犯行の描写はなされている。よって『姫の縄抜け』とか『目にも留まらぬ早業で注射』とか『遅効性の毒を飲んでいた』とかいうのはナシ
- 地の文に書かれていることは全て真実である」

そして松城は混乱したままの君に向かって一見笑いを堪えるような、あの人を虚仮にした嫌味な微笑を浮べてみせた。

「解った？」

解答編・ここで君には2つの選択が示される

「はい、答え」

松城はひらりと原稿用紙をよこした。

（以下は↓『サロメの牙（解答編）』全文です。）

サロメの牙（解答編）

- 領主を殺したのは姫である。
 - 凶器は毒、領主の死因は急性コンバラトキシシン中毒である。
-

※ここで君の反応は二手に分かれることと思います。お好きな方をお選びください。
なお、エンディングは共通ですのでその辺ご心配なく。

1. 「……あ、ふーん」→【解答編・1】
2. 「――納得いかあああああんっ！！」→【解答編・2】

それでは、解決編の続きをどうぞ。

「……あ、ふーん」

変な納得をしつつ原稿用紙をとみこうみしている君を、松城は珈琲カップを置き不服の眼差しで睨めつけた。

「何よ、それだけ？」

「いや、一応納得はしたし……」

コンバトキシン、という名前が出た時、君はふっと真相に思い至った。つまりーコンヴァリア・マヤリス＝ドイツ鈴蘭が凶器、という落ちなのだろう。肩透かしを食って慥然としている松城に君がそう告げると、松城は不服の色を表情から消した。

「へえ……流石ミス研メンバーね、カルト知識よこれ」

お互い様です。君は心の中でそう呟いた。

「じゃあカルト知識ついでに、このお話の舞台が何時の何処だかも解ったわね？」

「ええと……」

君は原稿用紙を繰り『清国の商人』『都から奢侈を禁ずる法律が出た』『舶来の材を使って』『本来なら知ることの許されない名である』という箇所を示した。封建制社会が存続している期間中鎖国していて、しかも国際レベルの財力を有し清と交流のあった海に面した国となればただ一つ、日本である。長崎であることは『目付も及ばない』唯一の地ということで、出島のある長崎と考えればよい。

「リンネがドイツ鈴蘭の記載を含む〈Systema Naturae〉の第十版を出したのは1758年だから、その後の奢侈禁令となると……」

「1789年3月の松平定信によるものになるわね。」

自分が何も付け足す必要はないと判断したようだ。松城はどこか満足げに珈琲を飲んでいる。銜学ネタは通用しなかったらしなくてまた嬉しいものなのだろう。

松城は不意にメタな発言をした。

「さて、エンディングと行きましょう」

「――納得いかあああああんっ！！」

君はテーブルをひっくり返して叫びたかったが、この落ち着いた空間でそんなことは出来ない。君に出来る事はただ松城に、怒りと共に湧きあがる疑問をぶつけることぐらいだ。

最初はやはり毒――コンバトキシンの出所である。

「ああそれ？ 鈴蘭の花に入っていたのよ。キツネノテブクロなどの植物に含まれるジキタリス類似の毒だけれど毒性はジキタリス以上で、特にドイツ鈴蘭の全草には多量に含まれているの。二本も食べれば確実に死ぬわ」

ドイツ鈴蘭？ そんなもの出てきたろうか。まさか

「もしや知らなかったんじゃないでしょうね？ ドイツ鈴蘭の学名はコンヴァラリア・マヤリスだっていうこと」

.....やられた。しかしまだ君に反駁の余地は残されている。まず、そんなポピュラーな花の毒性を領主が知らなかった、というのはおかしい。これでは領主が自殺したことになってしまうではないか？

「そんなこと極東の島国に住む人間が知る訳ないでしょう」

「極東の島国だって？」

「ええ、この小説の舞台は日本・長崎よ」

断定する材料がなかったっ！ 松城は怒る君を面白そうに眺めた。

「何言ってるの、ヒントは十分あった筈よ。まず小説全体の描写から、舞台となった国が或る程度国際社会に通用する財力を有する国であることが読み取れるわね。また『清国の商人』から清と交流があったこと、それに『都から奢侈を禁ずる法律が出た』とあるから、ここからこの国が封建制社会であることが解るでしょう。それから『舶来の材を使って』というところで、この国の物資輸入方法は舶来――つまり物資を船を使って海から輸入している、海に面した国であることが解るわ。

それからこれは少々難しいけれど『本来なら知ることの許されない名である。』という記述ね。これはドイツ鈴蘭の学名であるコンヴァラリア・マヤリスという名を指していることは明らかだけれど、この学名は1758年にリンネが〈Systema Naturae〉の第十版で体系化したものなの。それで倭約令が出されたこの時代は鎖国しているから、スウェーデン人であるリンネの著作が本来なら日本に入ってくることは許されていない筈よ。だからマヤリス、という名前は文字どおり『知ることの許されない』名ってわけ

。

さて、封建制社会が存続している期間中ヨーロッパに対し鎖国していて国際レベルの財力を

有し、なおかつ清と交流のあった海に面した国となればただ一つ、日本よ。長崎であることは『目付も及ばない』唯一の地ということで、出島のある長崎と考えれば良いわね。」

.....詭弁だ、それなら姫が菓子を食べても死ななかった説明はどうつける？！

「姫は王族だから鍛えていたの。あの時代に王族の子女が毒殺を防ぐために小さい頃から毒に慣らされていた.....って話、聞いたことない？」

そんな描写はなかった！ と叫びそうになる君を制し、松城は重ねて口を開いた。

「『人語を操る蛙、首だけの老婆と奇怪なものが跳梁する黒い森』『「茨の檻の中より」』——グリム童話って読んだことはあるわね？」

グリム童話はグリム兄弟の創作ではなく、その土地に伝わる民話である。つまり松城はこれらの口承文化が存在する土地・ドイツから姫が来た、と言いたいのだろう。しかし姫がドイツから来た証拠にはなっても、姫がドイツ鈴蘭の毒に慣れていた証拠にはならない。

「あら、もう一度良くご覧なさいな。姫は自分の名前を呼ばれても何の反応も示さず、好物の砂糖菓子も鋭いガラスの破片ですらも鼻先に突きつけられるまでは気づかない、その上ひどい目に逢っても悲鳴一つ上げない。また物凄く痩せているとも描写されているわね。失明、失語、難聴、極端な痩せ型体型.....典型的慢性コンバラトキシン中毒の症状じゃない」

二の句が告げない。

完全に頭が痛くなっている君を心底面白そうに眺めた後、松城はメタな発言をした。

「さて、エンディングと行きましょう。」

なんとか松城の作品を読み終えた君は、なんとも言えない脱力感に身を委ねていた。心地いいのが単に呆れ果てただけなのか、それは自分でも判然としない。ただ、店内に満ちる香ばしい珈琲の香りだけは、間違いなく君の精神を優しく癒してた。

——そういえばまだ、自分の分を注文してなかったな。

メニューを開く。見慣れたいつものラインナップだ。松城は何を飲んでいるんだろう？

「あのさ松城——」

テーブルの向こうに顔を向けた君は驚きに目を見張った。松城がいない。

何時の間に姿を消したのだろう。万年筆も原稿用紙も鞆も、一切が消え失せている。まるで、初めから君一人だけがこの席を占有していたかのようだ。

なんだったんだ？あれは夢だったのか？領主も姫も松城も、みんな自分の妄想だったんだろうか？

そんなに自分は疲れていたんだろうか？

ふっ、と君の口からため息とも笑みともつかない息がこぼれる。

こういう白昼夢も、偶には悪くないか。

君は微笑みながら何となく視線を下に向ける。

——いや、あった。松城のいた痕跡が。

テーブルの隅、空になったカップの下にしっかりと伝票らしき紙が敷かれている。

君はわずかに震える手で伝票を取り出す。

「……あの野郎、農地限定特選ブルーマウンテンプレミアム飲んで行きやがったーッ！！」

怒髪天を衝く君の叫びは、虚しく新宿のビルの中に飴し、そしてゆっくりと消えていった。

サロメの牙

<http://p.booklog.jp/book/58186>

著者 : liliput / aliliput

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/aliliput/profile>

<https://twitter.com/liliput>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58186>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58186>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ